

## 恋愛関係崩壊後の関係についての個人別態度構造分析

### Analysis of Personal Attitude Construct in Post-dissolution relationship

山 口 司

#### 目的

本研究の目的は、恋愛関係崩壊後のその後の関係（Post-dissolution relationship；以下、PDR）（増田，2001）の構造を理解するための手がかりを得ることである。

恋愛関係が青年期にとって重要な関係であることは言うまでもない。しかし、青年期の多くの恋愛には終わりが来る。栗林（2008）によると大学生の6～7割は、過去に失恋を経験しているとある。おそらく、失恋は青年が自分で築き上げた関係を喪失する最初の経験であると思われる。そういった意味で、死別などの対象喪失と比べて、あまり深刻に考えられないが、失恋は当事者にとっては非常にショッキングな体験であると思われる（飛田，1997）。一昔前では、恋愛関係が崩壊した後、別れた相手と関わりを持つことは、心理的・社会的に難しかったと思われる。また、そのような関わりを持つことは未練の表れであると考え、心理学的には不健康な関わりであると認識されていた（増田，2001）。しかし、近年の恋愛事情やコミュニケーション・ツールの発展に伴って、別れた後も関わりを持ち続けることが容易になってきている。そうすると、失恋後、別れた相手と関係を再定義し友人として関わり続けることも考えられる。実際に、そのような関係はどの程度あるのか。20～40代の未婚男女を対象にしたブライダル総研の恋愛調査（2013）では、

「恋人と別れても、友人として付き合っていたい」という設問に対して、20代の男女では約30%、30・40代でも約15%が「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」と回答している。別れた相手との関係性のことを俗に元カレ・元カノというが、元カレ・元カノという関係性については、ある程度、社会で認知されているにも関わらず、その実態や機能については明確にされているとは言い難い。心理学は、恋愛関係、友人関係、親子関係など青年期に関わる人間関係について検討してきたが、元カレ・元カノという関係についての研究は少ない。これは、「恋愛関係の崩壊＝別れ」という図式が過去一般的であったが、社会の在り方の変化によって、「恋愛関係の崩壊＝別れではない」と変化してきたのではないか。恋愛関係の崩壊という分岐点があることから、PDRは恋人関係ではなくなったと言えるが、再定義された関係が、従来の異性友人関係と同質の関係であるとは思えず、PDRは、今後、恋愛関係、異性友人関係に続く新しい異性関係の形として定着するのではないかとと思われる。

しかし、それを述べるには、PDRの研究が圧倒的に少ない。そもそも、PDRという関係は、どのような関係なのか。山口（2011）は、恋人、PDR、異性友人を交際内容（恋愛行動として、恋愛の進展に伴う排他性の高い行動と低い行動、友人的行動として、Companionship行動とConfidence行

動)から比較し、恋人とPDRが異性友人よりも排他性の高い恋愛行動をとり、恋人は全般的にCompanionship行動をとる傾向がみられたが、PDRは、Confidence行動をとる傾向が見られた。この結果は、PDRという関係が、公に認知されにくい、人目に着きやすいCompanionship行動を控え、Confidence行動という信頼や情緒的な結びつきにもとづく行動をとるためと推測され、恋人や異性友人とは質的に異なる関係であることが示唆している。しかし、続く研究(山口・今川,2010)では、RCI(Relationship Closeness Inventory)を用いて、恋人、PDR、異性友人の行動特性にもとづく親密性の比較を行ったが、恋人は、PDRや異性友人より親密性が高かったが、PDRと異性友人の間には親密性の顕著な差異がみられなかったりと、PDRと異性友人が異なる関係であるという山口(2011)を支持する結果がなかなか得られなかった。このことに関しては様々な原因が考えられる。1つは各関係の親密さなどを統制していないことが考えられる。普段、全く会わないようなPDRと普段からよく会う異性友人では、関わり方の質や量も関わってくるだろうし、その逆もしかりである。また、別れの主導権がどちらにあったのか、別れに納得しているのか、納得せずに未練が残っているのか、もともと恋愛関係中も不仲であったなどさまざまな要因を考慮する必要がある。そこで、本研究は、一度原点に戻り、面接調査を行いPDRの実態を明らかにしようと考えた。本研究に先立って山口(2011年9～10月調査;未発表)は、異性との関わりについて半構造化面接を行った。その対話の中で、多くの調査協力者は、PDRと異性友人とで異なるということ述べたが、調査協力者自身、具体的にその内容を示すことが出来なかった。そこで、本研究では、PAC分析(内藤,1993)を用いて、PDRに対して、どんな感情を抱き、どんな

行動をし、どのように関わりたいかを明らかにし、PDR理解のための手がかりを得ることを目的とする。

## PAC分析とは

内藤(1993)が個人別に態度構造を測定するために考案したもので、Personal Attitude Constructの略称でPAC分析という。PAC分析は、対象に対する認知やイメージの構造、葛藤、コンプレックスまで測定することができる。この分析方法は、当該テーマに関する自由連想(アクセス)、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、クラスター構造についての被験者のイメージや解釈の聴取、検査者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度・イメージ構造を測定する方法である。内藤(2002)は、「PAC分析が威力を発揮するのは少数者の質的分析においてである。わずか1事例であっても、要因やメカニズムは発見する可能性をもっているからである」(p.28-29)と述べている。このことから、PDRという未知の関係について検討するにあたって、PAC分析は非常に効果的であると思える。PDRは、社会的には非公式な関係であるため、そのスクリプトが明確になっておらず(Foley&Fraser, 1998)、そのため、個々人が独自の行動をとるため、今までの量的な研究では特徴が掴めないと思われる。そこで、個々人のPDRに対する態度構造を明らかにすることは、量的研究では、捉えることのできなかったPDRの側面を捉えることができると思われる。しかし、本研究の限界点として、あくまで1事例であることによって、PDRの多様な側面をみることはできない可能性も孕んでいる。

## 方法

日時：2012年1月

対象:PDRと関わりがある大学生女性(21歳)1名。

PDRとの交際内容:PDRと付き合いしていた時期は高校1年生から2年生の終わりまで付き合い合っており、その間、何度か別れと復縁を繰り返していた。別れた後も同じ高校であったことから関わりがあったが、大学進学を期に疎遠になる。調査協力者が大学3年生の時に、PDRから連絡がきて相談などを受けているうちに仲良くなった。会う頻度は少ないが、電話は週1回程度ある。メールはあまりしない。

PAC分析の提示刺激として「元カレ・元カノのことを思い浮かべて下さい。あなたが関わりがあり、その中でもっとも関わりが深いと思うあなたの元カレ・元カノのことを考える時、どんなことを思い浮かべ、どのような気持ちになりますか？また、元カレ・元カノと会う時、どんなことをしますか？また、元カレ・元カノとどんな風に関わっていきたいですか？頭に浮かんだイメージ(単語・文章なんでも構いません)を思い浮かんだ順に番号をつけカードに記入して下さい。」と示した。PAC分析の手続きについては、内藤(2002)に従い、刺激文の提示、自由連想、想起順位と重要順位の作成、項目間の類似度距離行列の作成、クラスターの算出、被験者による解釈の順に行った。尚、クラスター算出の統計ソフトには、HALWINを用いた。具体的には、上記の刺激文の提示後、思い浮かんだイメージを自由にカードに記述してもらい(自由連想)、その際に、記述した順に番号を振ってもらい(想起順位)、イメージがすべて出尽くしたところで、すべてのカードを見直して、「言葉自体の意味のイメージやプラスやマイナス、またはポジティブやネガティブといった方向性に関係なく、あなたにとって重要だと思う順にカードを並び替えて下さい」という教示の後に調査協力者自身が重要だと思う順にカードを並び替え、重要

度が高いと順番から番号を振ってもらった(重要順位)。その後、ランダムに並び替えたカードを2対ずつ提示し、7段階評価で、2対のカードがどの程度似ているか(関連があるか)をすべての組み合わせを口述で聞いていった(項目間の類似度距離行列の作成)。その類似度距離行列を用いてクラスター分析(ウォード法)を行い、算出されたデンドログラムを調査協力者とともに解釈し、最後に、「言葉自体の意味にとらわれず、それぞれのカードに、そのイメージがプラスなら+を、マイナスなら-を、どちらでもない場合は0を記入して下さい」と教示し、カード記入後、改めて、全体のイメージについて解釈を行った。

## 結果と考察

クラスター分析の結果を図1に示す。連想項目数は、34個であった。また、クラスター間の比較を表1に示す。クラスター間の比較は、相互の比較を通じてそれぞれのクラスターが内包している意味合いがより明確にされる効果をもち、全体構造を理解するのに役立つ。以下「」内は調査協力者の発言、【】はクラスター名、〈〉は項目名、( )は省略語を表す。調査協力者との話し合いの結果、【電話での近況報告】、【常時話す内容】、【楽しい】、【PDRに対する最近のイメージ】、【関係性】、【PDRに対する以前からあるイメージ】、【最近話した内容】の7つのクラスター構造が確認された。【電話での近況報告】は、4項目からなっており、PDRと最近は会う機会が少なく、携帯電話でのやりとりが主で、その際、〈近況報告〉をするという。「一番彼とつながりやすいツール」が〈携帯(電話)〉や〈電話(をする)〉である。〈何してるかなー?〉は、「今、何をしているのかなと思う時がある。自分が悩んでいたり、相談したいなという時に、何しているかな?電話

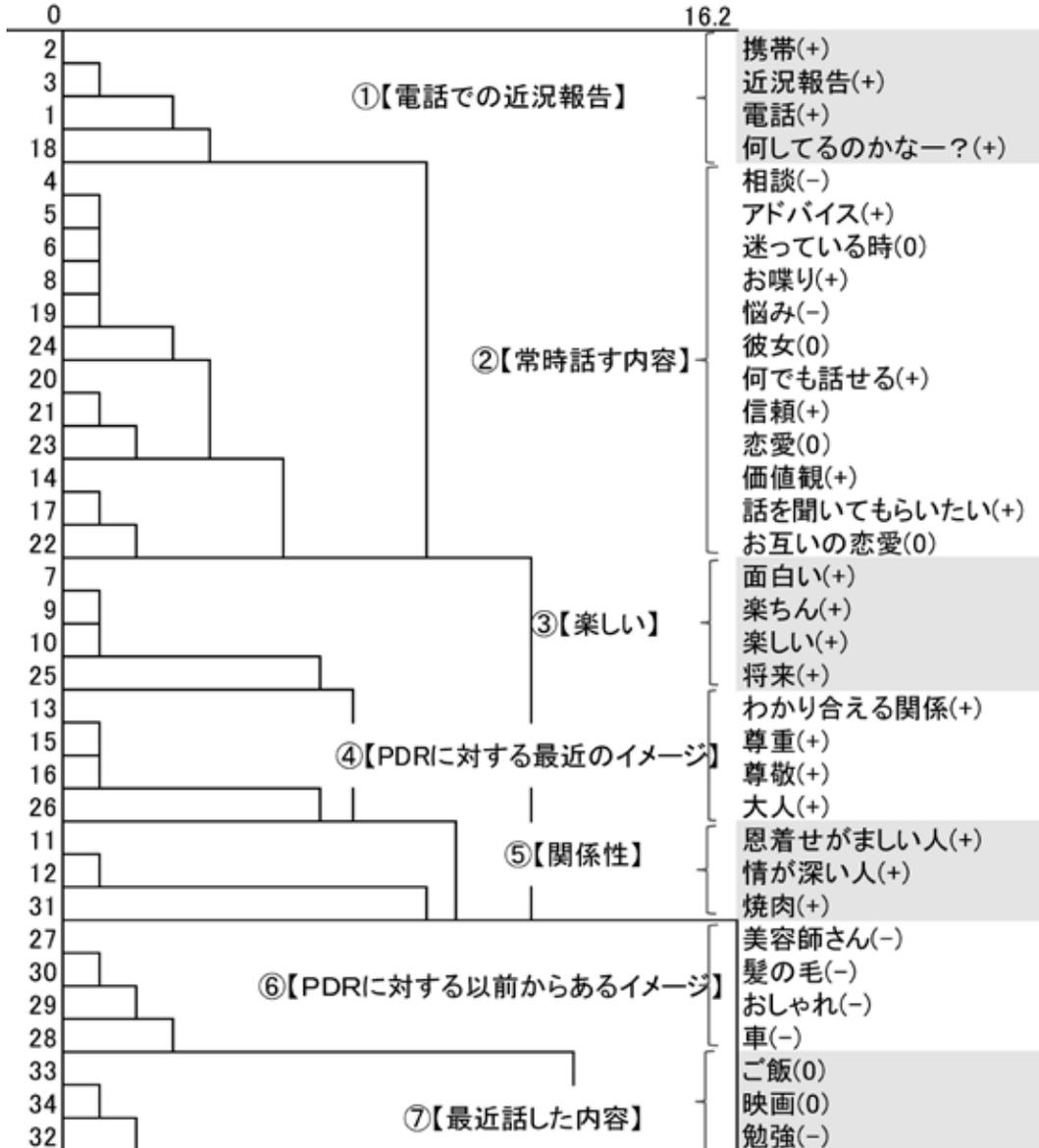


図1. PDRに対するデンドログラム (左数字は重要順位)

できるかな?と思う」ということをイメージしている。【常時話す内容】は、12項目からなっており、PDRとの会話の内容やPDRと話すときの自分の気持ちのあり方を示すクラスターである。PDRを頼ることが多く、〈相談〉や〈アドバイス〉をもらうことも多い。また、PDRを〈信頼〉し〈価値観〉を認めてくれるので〈何でも話せる〉し、〈話を聞いてもらいたい〉と語っていた。しかし、一

方的に、相談をするのではなく、PDRの〈彼女〉の話や〈恋愛〉の相談も聞き、〈お互いの恋愛〉の話もしている。【楽しい】は、4項目からなっている。PDRといると〈楽ちん〉、〈楽しい〉と感じる。特に〈将来〉の話をするのが〈楽しい〉。【PDRに対する最近のイメージ】は、4項目からなっている。このクラスターは、「関係が復活してからの彼(PDR)のイメージ」であり、社会人として

表1 クラスター間の比較

**【電話での近況報告】と【常時話す内容】の比較**

「電話したいなと思う時、話を聞いてもらいたいなと思う時、今、何しているのかなと思う時は、私は恋愛で悩んでいる時や何かアドバイスをもらいたいなと思う時なので、この2つは関連が近いと思います」

**【電話での近況報告】と【楽しい】の比較**

「電話していたら、楽しいので、この2つも関連があると思います」

**【電話での近況報告】と【PDRに対する最近のイメージ】の比較**

「電話している時、話していて大人だなと感じる時もあるし、会っている時も大人だなと感じる時もあるので少し似ていると思う」

**【電話での近況報告】と【関係性】の比較**

「電話で何食べに行く？焼肉！」「いいよ」という感じなので関連はある

**【電話での近況報告】と【PDRに対する以前からのイメージ】の比較**

「【PDRに対する以前からのイメージ】は彼のことだから関係ない」

**【電話での近況報告】と【最近話した内容】の比較**

「電話で最近話した内容という意味では似ているかな」

**【常時話す内容】と【楽しい】の比較**

「相談とかしていても、お互いの恋愛の話をしていても楽しい。で、気持ちが楽だから、なんでも話せるし、楽しい」

**【常時話す内容】と【PDRに対する最近のイメージ】の比較**

「PDRのことを尊敬しているし、尊重している。彼が大人だから何でも話そうと思う。」

**【常時話す内容】と【関係性】の比較**

「焼肉は重要。焼肉を決める時、恩着せがましいや情が深いに関係しているんですけど、話している時も、私が一方的に話しても、彼がずっと聞く側に回っていても、以前、彼が話を聞いてもらったという恩を感じており、それに対して、そうでしょ。私、前に聞いてあげたんだから、今度は聞いてという態度で話してしまう」

**【常時話す内容】と【PDRに対する以前からのイメージ】の比較**

「まったく関連がない」

**【常時話す内容】と【最近話した内容】の比較**

「【最近話した内容】は、一方的に話しただけの雑談で相手にアドバイスなんかを求めていたわけではないけど、【常時話す内容】は互いに話し合いがある。また、【最近話した内容】は本当にたまたま最近話した話」

**【楽しい】と【PDRに対する最近のイメージ】の比較**

「楽ちんっていうのは、わかりあえる関係であったり、彼を尊敬し、尊重しているからであるし、大人っていうこともあるからであるから気持ちも楽」

**【楽しい】と【関係性】との比較**

「私が恩着せがましい感じで話して、彼がうんうんと聞いているだけで、私にとっては楽だし、楽しい、それで本当に自分勝手に話すなって言われたけど、話しても相手も嫌じゃないって言った」

**【楽しい】と【PDRに対する以前からのイメージ】の比較**

「美容師や髪の毛、車の話をされても私は全然わからないし、これは彼の特徴なんだけど、会話の内容でもあって、どちらにしても楽しくない」

**【楽しい】と【最近話した内容】の比較**

「最近話した内容はどうでもいい話だから、なんの関連もない」

**【PDRに対する最近のイメージ】と【関係性】の比較**

「私がめっちゃ恩着せがましいことを言っても、彼は大人だからわかってくれるから、しかも、大人だから焼肉もおごってくれるから」

**【PDRに対する最近のイメージ】と【PDRに対する以前からのイメージ】の比較**

「なんか美容師さんの彼も、おしゃれな彼も、車の好きな彼も、別に尊敬していないし、どちらかというとそれらのものを私が付き合っていた当時から変わっていないというか、だから、なんとも思わないし、むしろ髪の毛とかにこだわっているのはなんかもう高校生の彼を思い出させるような感じがするから大人ではない」

**【PDRに対する最近のイメージ】と【最近話した内容】の比較**

「会話の内容は関係ない、雑談だし」

**【関係性】と【PDRに対する以前からのイメージ】の比較**

「恩着せがましい人は、私の事だし、情が深い人というのは彼の事だし、情が深い彼というのも私が知っている中でも結構ここ最近で私にありがとうか思っているというのが最近」

**【関係性】と【最近話した内容】の比較**

「【最近話した内容】は本当にたわいもない話だから、関係ない」

**【PDRに対する以前からのイメージ】と【最近話した内容】の比較**

「彼のイメージと雑談だから、関係ない」

〈大人〉になったと語っている。また、学生である自分と比較して〈大人〉という意味もある。そして、〈尊敬〉、〈尊重〉できるからこそ〈わかり合える関係〉になった。【関係性】は、3項目からなっている。〈恩着せがましい人〉は調査協力者自身のことで、関係復活のきっかけとなったPDRからの相談を未だに、持ち出し恩着せがましくPDRに、〈焼肉〉をおごってもらおう。その一方で、PDRは〈情が深い人〉で、〈焼肉〉を食べたいと言ったら、連れて行ってくれるという、二人の今の関わりを表している。【PDRに対する以前からあるイメージ】は、4項目からなっている。〈美容師〉、〈髪の毛〉、〈おしゃれ〉、〈車〉というイメージは、付き合っていた時からもっていたPDRのイメージで、時に、会話の話題にもなるが、調査協力者は関心がない話題なので、-のイメージを持っている。比較的過去のPDRのイメージが強い。【最近話した内容】は、3項目からなり、最近話した内容。特に重要な話題ではない雑談なので、0のイメージが強い。総合的な解釈としては、7つのクラスターはさらに、PDRとの関わり、今の二人の関係性、PDRの以前から印象、最近話したこと・雑談の4つの大きなクラスターに集約できると思われる。

## PDRとの関わり

【電話での近況報告】と【常時話す内容】の2つのクラスターをまとめたもので、現在のPDRとの関わりを表すクラスターと考えられる。クラスター間の比較でも見られたように、この2つはかなり関連が強くPDRとの関わりの核心となっていることが伺える。PDRとの接触方法は主に、携帯電話である。これは、常時会ってなくても、関係が継続することを意味している。このような側面は友人関係にもみられる。丹野(2007)は、普段から会う機会の多い親しい同性の友人(HI

友人)と会う機会は年に数回以下だが、親しい同性の友人(LI友人)の友人関係機能を比較し、大学生の友人関係には、接触を伴わなくても個人の内的適応に影響を及ぼしうる関係が存在しているとし、頻繁な関わり合いだけが重要なのではなく、対人関係が存在していること自体も適応に影響を及ぼしているとしている。本調査の関係も電話でのやりとりはあるが実際の接触頻度は少ない。しかし、何でも話せ信頼できる関係を形成している。山口(2011)では、あくまで傾向であるが、PDRは、Confidence行動をとる傾向が見られ、PDRという関係が、公に認知されにくいいため、人目に着きやすいCompanionship行動を控え、Confidence行動という信頼や情緒的な結びつきにもとづく行動をとると推測している。今回の事例においても同様の行動が見られたと言える。ここから、PDRの特徴の1つとして、表立って会ったりはしないが、何かの拍子に役立つような関係というのが考えられるのではないかと、そして、このような関係を結びつけるのは、継続された絆の一種ではないかと考える。継続された絆とは、喪失研究領域の概念で、遺族の心の内で故人との継続的な関係性が存在することを意味する(Stroebe&Schut, 2005)。従来、喪失研究領域ではグリーフ・ワークとして、故人との絆の放棄が正常な悲嘆の過程であり目的とされ、それが達成されて悲嘆を乗り越えたとされていた。しかし、近年は、多くの遺族が故人との絆を保持していることが明らかとなっている(Klass et al., 1996)。そして、このような故人との継続された絆は生前と同様の絆ではなく、新たな絆を結ぶ、関係性の変容であると捉えられている(Boerber&Heckhausen, 2003)。そのような観点から捉えると、PDRは、一度関係が解消し別れてしまったが、絆が形を変え再定義された関係であるといえる。しかし、死別と離別である失恋とでは、質的な差異の存在は無

視することができない。継続する絆は故人との絆について言及しているが、PDRは死別しているわけではなく、PDRは物理的には、この世に存在している。失恋によって切れた絆は、心理的な絆であり、物理的な関わりがある場合は、PDRとして関係が継続されるかもしれないし、物理的な関わりが切れても、心理的な絆がある場合は、PDRとして関係が継続されることがあるかもしれない。そういった意味では継続された絆というよりは、半継続された絆であり、PDRは何らかの恋人時の名残を残した関係と言える。現に、クラスター構造を見ても、現在のイメージと過去のイメージが混在している。そして、この物理的には関わりがあるが、心理的には関わりがない、または、物理的には関わりがないが、心理的には関わりがあるといったような曖昧な状況は、PDR状態にある人に葛藤を生み出すのではないかと推測できる。このような新たな絆の形の存在は、【常時話す内容】と【PDRに対する最近のイメージ】の比較での言葉、「彼のことを尊敬しているし、尊重している。彼が大人だから何でも話そうと思う」にも表れている。交際していた時の彼、つまり、【PDRに対する以前からのイメージ】では、話せなかつたことが、関係が解消し、最近、PDRとの再会を機に新たな絆が形成されたので、話すことができるようになったと推測される。つまり、Companionship優性の関係から、Confidence優性の関係に変化したのではないか。また、相談や話を聞いてもらいたいという側面に関して、山口・今川(2010)では、PDRと関わりをもつメリットとして、「ネットワークの拡大」、「良き友人・理解者・相談者・話相手」、「ポジティブ感情の喚起」、「精神的な支え」を挙げている。まさに、本調査協力者にとってPDRは、良き理解者であり、相談相手となっている。ちなみに、デメリットとして挙げたのは、「情報の漏洩」、「他者からの疑惑・誤解」、「ネガ

ティブな感情の喚起」、「哀愁の喚起」、「嫉妬、未練の喚起」、「次の恋愛への足枷」であった。別れたのに、Companionship行動をとると他者から復縁したと誤解されることもあり、CompanionshipからConfidenceへ関係に応じた行動様式に変わる場合もあるのかも知れない。

## 今の二人の関係性

【楽しい】、【PDRに対する最近のイメージ】、【関係性】をまとめたもので、今の2人の関係性を表している。この関係性があるからこそ、上述のPDRとの関わりがあるとしている。

## PDRの以前から印象

【PDRに対する以前から持っているイメージ】からなっている。交際していた時の過去のイメージである。別れた後でも、過去のイメージは払拭されず、根強く残り、その上に新しいPDRのイメージが形成されると思われる。そして、この【PDRに対する以前から持っているイメージ】は、現在の関わりと分離できた時、新たな関係性を形成できると推測される。本調査協力者のように、現在の関わりと過去のイメージが同時に見られることは関係性が変容しているという意識の顕れとして見れるのではないか。一方で、過去のことばかり想起される場合は、関係性の変容が達成できず、未だ立ち直れていないのではないと思われる。

## 最近話したこと・雑談

【最近話した内容】からなっている。イメージとして挙げてきたのは、最近のPDRとの関わりの内容で、本人も雑談と言っており、【最近話した内容】は、どうでもいいと発言

している。PDRについてイメージしてもらったので、一番、最近の関わりが想起されたとされる。

全体的なイメージとしては、+のイメージが22、-のイメージが6、0が6であった。調査協力者は、PDRに対して+のイメージを強く感じていることがわかる。特に重要順位の上位6つに絞って見てみると、現在、PDRと〈携帯〉を通じて繋がりがより〈近況報告〉をすること、また、〈迷っている時〉に〈アドバイス〉をもらうことから、日常の出来事などを話すことや何か悩みがある時に頼るといった緊密な関係であることがわかる。ここから、PDRという関係が失恋後のギクシャクした関係という側面だけではなく、場合によっては心理的サポート源になるような関係であると言える。調査協力者の印象的な言葉として、「彼（PDR）は、私のすべてを知っているから、ダメなところも。ダメなところを知っている上で今も関わってくれているということもあるし、何でも話せたりするのか…」といった言葉があった。この言葉が示すように、PDRは付き合いのたからこそ自分の良い面も悪い面も知り得ているので、別れた後も、自分を受け入れてくれる重要な存在として意義のある関係であると認識するのかもしれない。また、調査協力者はこんなことも言っていた。「もし、付き合い合っていたという過程がなかったら、今、この関係にはなっていないと思う」。恋愛関係の崩壊が必ずしも悪影響を与えるだけでなく、その後の新しい関係の始りになる可能性がある。そのためには、恋人の時とは異なる関係性を築く必要があると思われる。山口（2011）では、PDRは恋人や異性友人とは異なる関係であることがわかっている。そういった意味でも、別れた後も恋人と同じ関わり合いではPDRと良い関係は築けないであろう。そんな関係は未練があり、不健康な関係になり、関係解消後にトラブルを起こすか

もしれない。最後に、本調査で得られた結果は1事例のみの結果である。今後はもっと多くのケースを検討し、本調査で得られた結果と他のケースとの共通性、独自性を検討する必要がある。

## 引用文献

- Boerber, K., & Heckhausen, J. 2003 To have and have not : Adaptive bereavement by transforming mental ties to the deceased *Death Studies* 27 199-226
- Foley, L. & Fraser, J. 1998 A RESEARCH NOTE ON POST-DATING RELATIONSHIPS : The Social Embeddedness of Redefining Romantic Couplings *Sociological Perspectives*, 41, 209-219
- ブライダル総研2013 “恋愛観調査”2013 [http://www.recruit-mp.co.jp/news/release/2013/0801\\_989.html](http://www.recruit-mp.co.jp/news/release/2013/0801_989.html)
- Klass, D., Silverman, P. R., & Nickman, S. (Eds) 1996 *Continuing bonds : New understanding of grief*. Washington, DC : Taylor & Francis
- 飛田操 1997 失恋の心理 松井豊（編）*悲嘆の心理* サイエンス社 205-218
- 粟林克匡 2008 恋を失う 加藤司・谷口弘一（編）*対人関係のダークサイド* 北大路書房 89-102
- 増田匡裕 2001 以前の恋人との友人関係（PDR）と新しい恋愛関係の交渉と葛藤についての探索的研究—対人関係の正当性に関するフォーク・サイコロジー— *日本社会心理学会第42回大会発表論文集*, 250-251
- 内藤哲雄 1993 個人別態度構造の分析について *人文科学論集（信州大学人文学部）* 27 43-69
- 内藤哲雄 2002 *PAC分析実施入門* [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- Stroebe, M. S., & Schut, H. 2005 To continue or relinquish bonds : A review of consequences for the bereaved. *Death Studies* 29 477-494
- 丹野宏明 2007 友人との接触頻度別にみた大学生の友人関係機能 *パーソナリティ研究* 16 (1) 110-113
- 山口司・今川民雄 2010 PDRにおける行動特

性としての親密性の検討—恋人関係と異性友人関係との比較を通じて— 対人社会心理学研究 10 163-168

山口司 2011 恋愛関係崩壊後の関係における交際内容に関する研究—Post-dating relationshipと恋愛関係、異性友人関係との比較— 北星学園大学大学院論集14 47-60

